

今日はイースターです。今朝の賛美歌で私たちは「ハレルヤ」と歌いました。「ハレルヤ」というのは、「ハレル」（賛美せよ）「ヤー」（主を）という意味です。もともとはヘブル語ですが、「アーメン」という言葉と同じように、これは世界共通語になっています。神の真理に対してアーメン、神のみわざに対してハレルヤと答えることができるのは、素晴らしいことです。イースターの朝、私たちも、もういちど、こころ一杯ハレルヤを唱えましょう。

さて「イースターとは、矛盾した祝日です」と言った人がいます。何が矛盾かということ、罪のない方が裁きを受け、正しい方が罪を背負って十字架におかかりになり、神の子が父なる神から見捨てられ、人にいのちを与える主が死なれたからです。どれも本当に矛盾しています。さらに加えての矛盾はイエスの墓を訪ねに来た婦人たちが、その墓でイエスはよみがえられたというメッセージを聞いたことです。彼女たちは、死以外何も示さない墓場でいのちのメッセージを聞いたのです。普通お墓が示すものは死以外にありません。どんなに美しいお墓であってもそこで示されているのは人間の死です。しかし婦人たちは死のみ強調される墓においていのちが生み出されたことを聞いたのです。「あの方（主イエス）はよみがえられました」と。墓場で新しいいのちの誕生を聞くとはまさに、大きな矛盾です。しかしそれは喜びに満ちた矛盾です。今朝は、最初のイースターの朝に、イエスの墓に来た婦人たちのことから、喜びに満ちた矛盾について学びたいと思います。

まず第一にとりあげたい矛盾は「生きた方を葬る」という矛盾です。マルコの福音書 16 章 1 節に「さて、安息日が終わったので、マグダラのマリヤとヤコブの母マリヤとサロメとは、イエスに油を塗りに行こうと思い、香料を買った」とあります。「イエスに油を塗る」というのは、葬りのためにそのからだに香油を塗るということでした。古代では、遺体に香油を塗って墓に納めるという習慣がありました。しかし、十字架で処刑されるような犯罪人は葬られることなく、ゴミ捨て場となっている谷に投げ捨てられるだけでした。イエスもそのような犯罪人の一人として十字架につけられました。ですから普通なら、墓に葬られることなどあり得ません。ところが、アリマタヤのヨセフという人がひそかにイエス・キリストを信じていて、イエスの遺体を引き取り、彼の墓に納めたのです。しかし、その日は金曜日で夕暮れも近づいていました。金曜の日没と同時に安息日が始まりますので、婦人たちは香油を買い、それをイエスのなきがらに塗ることができませんでした。ユダヤの人々は、安息日には、どんな仕事もしてはいけなかったからです。それで、彼女たちは安息日があける土曜日の日没まで待ち、それからすぐに香油を買い求め、夜明けを待って、日曜日の朝、墓に行ったのです。

この婦人たちは、イエスのために高価な香油を買うほどにイエスを慕っていました。イエスが十字架につけられた時に、自分たちも捕まえられるのではないかと恐れて隠れていた男の弟子たちに比べればずいぶん勇気がありました。まだ暗いうちから女性だけで、墓地に向かっていったのですから。彼女たちの愛も、熱心も、勇気も誉められるべきことですが、彼女たちのしたことは見当はずれのことでした。何故ならイエスはすでに復活しておられて、もう墓にはおられません。彼は、生きておられるのです。生きておられるお方に葬りの香油は要りません。しかし婦人たちは、イエスが復活されるなどということは全く想像もしていませんでした。彼女たちは、せめてイエスの遺体に香油を塗りたいと思って墓にやって来たのです。彼女たちは当然ですがイエスの遺体が墓の中にあると信じこんでいました。ですから彼女たちがしていることは復活し生きているお方を再び葬ろうとしていたのです。イエス様、お可哀そうにといいましょうか？それはまったく見当違いで矛盾したことだったのです。しかし、私たちは彼女たちを愚かだと笑うことはできません。私たちの方こそイエスがよみがえられたことを知っていながら、イースタ

一を祝っていながら、まるでイエスがまだ墓の中におられるかのようなふるまいをしているようなことがないでしょうか。こんな話があります。宗教改革者ルターがひどく落ち込んでしまっている時、奥さんが喪服を着て彼の前に現われました。ルターが驚いて「いったいどうしたんだ」と聞きますと、「あなたのイエスさまは死んでしまわれたままなので、私は喪服を着ているのです」と答えたというのです。この時のルターと同じように、私たちも、行き詰まってしまったり、困難に遭ったりして、神を見失ってしまうことがあります。問題に押しつぶされてしまって、その問題を神のもとにもっていくことを忘れてしまうのです。そして一人で思い悩むのです。「神様は私を見放した」とか「神様にだってこの問題は難しく手が出ないでしょう」と、神の全能の力を制限してしまい、まるで神が生きておられないかのように感じてしまうこともあるのです。しかし、神は生きておられます。神は全能のお方であり、その全能の力を最もよく表わしてくださっているのが、キリストの復活なのです。

今朝の聖書の箇所に見る第二の矛盾は「平安から恐れへ」ということです。この婦人たちはイエスに出会い、イエスを信じ、イエスに従ってきた婦人たちでした。金曜日には恐ろしい十字架がありました。彼女たちの嘆き悲しみはどんなだったろうかと思えます。しかし、彼女たちは、いつまでも嘆き悲しむだけの人たちではありませんでした。金曜日にはイエスの葬られた墓を確認し、土曜日には香油を買い求め、そして日曜日の朝早くには、イエスの墓に向かっています。彼女たちは、夜明けと共に墓に向かうという大胆なことをしていますが、それは決して思いつきの行動ではなく、きちんと準備されたものでした。彼女たちの、この落ち着いた行動から分かるように、彼女たちには、自分たちの主を失った悲しみをつきぬけた、ある種の平安があったようです。少し分かる気もいたします。私たちが知っている人が亡くなったことの悲しみと共にその後、ちゃんと葬儀があり、墓に入れるのかという不安も起こるものです。彼女達も、もうすぐ主のなきがらと対面できるのだということに慰めを感じていたことでしょう。自分たちの手で、香油を注いで葬りができるという期待もあったことでしょう。ところが、彼女たちのこの平安、慰め、満足は、空っぽの墓と御使いのメッセージによって消し去られました。墓を警護しているはずの番兵はどこかへ行ってしまっており、墓の入り口をふさいであったあの大きな岩も転がされていたのです。そして、墓にいたのは、イエスのなきがらでなく、み使いでした。イエスの墓の中にいた「真白な長い衣をまとった青年」というのはみ使いのことです。み使いは、婦人たちにイエスの復活を告げました。「驚いてはいけません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょうか。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められた所です。」墓に来た婦人たちは、この出来事を見て、腰が抜けるほど恐れしました。死んだ人しかいないはずの墓から声がし、生きて人が出てきたわけですから、彼女たちが驚いたのは当然です。「女たちは、墓を出て、そこから逃げ去った。すっかり震え上がって、気も転倒していたからである。そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」(8節)と書いてあるとおりです。彼女たちは再び恐れの中に投げ込まれました。

イースターの朝、やっと平静を取り戻した彼女たちは恐れに投げ込まれました。イースターは、キリストを慕って、キリストのなきがらに香油を塗るためにやってきた、けなげな女性たちを驚かせ、おびえさせたのです。イースターが、心の平静を求めてきた人々に恐怖を与えるというのはなんと矛盾したことでしょうか。しかし、イースターは実際、心静かに迎えられるような祝日ではありません。それは、むしろ大いに驚き、恐れ、そして飛び上がって喜ぶ祝日かもしれません。

神が私たちに与えようとしておられるのは、その場かぎりの気休めや一時的な満足ではありません。もっと偉大なもの、霊的なもの、永遠のものです。神は私たちに、本当の平安を与えるために、あえて、私

たちを不安の中につきおとされることがあります。もっと大きな神の力に頼らせるために、人間的な助けを取り除かれることもあります。嵐の後に訪れる本物の喜びを与えるために深い悲しみに沈ませることもあります。キリストの復活は、私たちの気休めを打ち壊し、一時的な楽しみを取り去り、自己満足に戦いを挑んでくれます。しかし、私たちがキリストの復活を信じる時、よみがえられて今も生きておられる、わたしと共に生きてくださるお方に信頼する時、どんなものにも奪われることのない本物の平安を、何者にも脅かされることのない大きな力を受けることができるのです。

イースターの朝に見ることのできる第三の矛盾は、「恐れ」から「喜び」が出てきたということです。イエスの復活は、墓に来た婦人たちを恐れさせ、おびえさせてあまりある出来事でした。しかし、驚き、恐れている婦人たちにすぐに「驚くことはない」ということばが与えられました。「驚くな」ということばには「恐れるな」という意味が含まれています。マタイの福音書では、み使いが「恐れてはいけません」と語ったと書かれています。神は、イースターの出来事に「大いに驚け、恐れよ」と言われ、同時に「驚くな、恐れてはならない」と言われるのです。おかしいでしょう。どっちやねんと。矛盾していますが真実です。キリストの復活は私たちを驚かせ、恐れさせるものであるのに、同時に、私たちから恐れを取り除くものなのです。私たちはキリストが復活され、すべての主権、権威、力を持っておられるということに恐れをもって受け入れなければなりません、キリストが復活され、私たちに永遠の命を与えてくださるゆえに、私たちは今まで恐れていたものを恐れる必要がなくなったのです。

私たちはいつも、いろんなことを恐れています。「健康を失ったらどうしよう、仕事を失ったらどうしよう、友だちを失ったらどうしよう、人に悪く思われたらどうしよう」などと、私たちは様々なことを恐れます。それは、悩んでいる人にとっては大きな問題なのですが、神の目から見れば、そうしたことは本当に恐れなければならないことではないと、聖書は言っています。イエスは「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい」（マタイ 10:28）と言われました。私たちが、本当に恐れなければならないものを恐れることができたなら、多くの小さな恐れは消え去っていくのです。星野富弘さんも、「いのちが一番大切だと思っていたころ、生きるのが苦しかった。いのちより大切なものがあると知った日、生きているのが嬉しかった。」このように言いました。キリストの復活を信じる時、私たちは恐れから解放されるのです。

この、イースターの朝、私たちも「恐れるな」との神のことばに耳を傾けましょう。マルコの福音書は「女たちは、墓を出て、そこから逃げ去った。すっかり震え上がって、気も転倒していたからである。そしてだれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである」（8節）とのことばで終わっていますが、他の福音書を見ると、この婦人たちは後に「恐ろしくはあったが大喜びで…弟子たちに知らせに走って行った」（マタイ 28:8）とあります。大きな恐れから大きな喜びが生まれました。墓場から命のメッセージが語り出されました。死者を弔うために出かけて行った人々が、復活の知らせを運びました。人間的な平安は恐れに変わりましたが、その恐れは再び、確かな希望と平安に変わったのです。私たちは、このイースターの矛盾を心から喜ぼうではありませんか。イースター、それは死が命へと導かれ、恥辱と蔑みの十字架が、栄光の十字架になるのです。